

ボクがマイケル

だったころ（一）

赤木 マリオ

気がつけばオリの中、これがボクの生涯のはじまりだ。しかも、人間様と比べて寿命は短い。最近では、ボクたちの生體もよく知られ、食事や医療も改善されている。動物愛護精神も普及し、昔ほどひどい取り扱いも減った。それでも十五年程度の命だろう。

だが健康にはあまり自信がない。話しはじめてみたものの、いつ何時、中途半端に中断、あるいは終了の憂き目を見るかもしれない。その時は、切にご容赦願いたい。それではとりあえず、犬としての生涯と感想、お聴きください。

ボクたち兄弟はある年の年末に生れ、ひと月を少し過ぎただけで、母親から離された。まだ母乳が恋しかった。その

せいか、人の指であろうが、椅子の足であろうが、何でもガリガリとかじる癖が身についた。もつともただかじるだけで、人を傷つけることはなかった。引き取られた家では、その癖が治るまで、一年以上リフォームすることができなかった。

岡山から奈良に売られてきて、ペットショップのオリの中で、ボクたち四頭が一緒に暮らす日々がはじまった。これが人間なら一大事だ。人身売買なのだから。でもボクたちは悲しいかな、犬に過ぎない。この地球上でもつとも残酷な動物、人間の支配する、逆らうことのできない運命に翻弄される定めた。

余談になるが、このショップの大きな看板には、まるでボクがモデルであるかのように、そっくりそのままの黒柴の絵が描かれている。ボクが死んでしまっても、掛けかえられずに残されている。まるで肖像画だ。平面になったボクの声、誰か聞いただろうか。

二月のまだ寒い日、夫婦と二人のわんぱく坊主が、興味津々の表情でボクたちのオリを覗き込んだ。二頭の兄妹は寝ており、すぐ下の弟は四人家族に関心を示さなかった。ボクはといえば、オリ越しに入れられた、煙草のヤニ臭い指先に誘われて、ついついその指に近寄ってしまった。これがボクの運命を決めた。ヤニ臭い男は柄にもなく、普段見せることのない優しい笑みを浮かべて言った。

「こいつにしよう。ええか」

つまり、ボクは買われてしまったのだ。なんと簡単にボ

クの運命が決まってしまうのだろう。主体の自由などありはしない。

これがボクと新しい家族との生活のはじまりとなった。ボクの本当の主人は、その家の次男、九歳の男の子で、ボクはその子の誕生日プレゼントということになる。しかも現金決済ときたもんだ。人身売買は御法度なのに、犬類売買は当然に行われるとは、人類の身勝手な厚顔無恥ぶりはどうだ。まあ、愚痴を言ってもはじまらない。これがボクたちの宿命なのだから、この一家の一員として生きるほかに道はない。さもないと売れ残って廃棄処分、悲惨な昇天となるかもしれないなかつた。

しばらくの間、適切に温度調節されたベットショップにいたので、この家に連れて来られ、猫の額ほどの小さな玄関に置かれたとたん、セメントの冷たい感触が足裏から全身に伝わった。たちまち、腹を絞るような感触が襲った。直後、肛門が熱くなった。やってしまった。下痢だ。反射的にボクはオヤジを見た。でかい顔が渋くなっていた。何やらあわてた口調で、ドタバタと廊下の奥にかけていった。取って返したオヤジは、温かいお湯でボクのお尻を洗った。気持ちよかつたのはその時だけで、すぐに冷え込んできた。オヤジはあわてて古いタオルでボクを拭いたが、寒さは収まらなかつた。抱きかかえられたボクは、リビングに連れてこられた。やつと温かい部屋に來れた。

段ボール箱の中に毛布が入れられ、ボクの居場所が整えられた。これで落ち着いて寝られるつてものだ。やれやれだよ。

落ち着いたところで、名前が決められた。マイケル。タレントのではない。バスケットボールのマイケル・ジョーダンから名付けられた。子供たちが名付け親だ。特に長男の押し強さで決定したようだ。まあ、悪くはない。こんなふうにして、ボクのドタバタの転居が完了した。

人間の赤ん坊同様、小さい頃は誰もが可愛がつてくれる。ボクとて例外ではなかつた。段ボール箱でちやほやと可愛がられ、育てられた、文字通り箱入り犬というところだ。しばらくは、飼い主の気分次第で、猫かわいがりされたものだ。最初は段ボール箱にすっぽり収まるほど小さな身体、だつたが、当然のことながら、素早い成長で、とうとう頭ひとつダンボールからはみ出るまでになつた。このダンボールの縁に頭を仰向けにもたせ掛け、腹を上にして寝るのがなんとも気持ちよかつた。暖房が入っているからだとは、気がつかなかつた。飼い主たちはボクのおなかを撫で、頭を撫で、全身を撫でた。母親の愛情をたつぷり味わうこともなく引き離されてしまつたボクは、幸福感に浸つた。もつともオヤジはかなり神経質で、ボクに触れた後は、必ずハンドソープで手を洗つていたがね。軽い神経症かもしれない。

こうするうちに、リビングの片隅にステンレス製のオリが据えられた。ボクはその中へ移された。その小さな一角にオシッコ用のシートが敷かれた。その片隅で用を足すことを覚えた。オシッコで濡れた上に寝るわけにはいかないもの。

自分の排せつ物の上で寝るのが平気になったら、犬もおしまいだからね。

しばらくすると、オリを出され、六畳程度のカーペットの上で、ボクの領域として割り当てられた。排便はカーペットの片隅に置かれたシートの上と決められた。カーペットの外側は、飼い主たちのテリトリーというわけだ。カーペットの外に出るのも遠慮だったが、それもとうとう乗り越えた。

リビングと廊下を仕切る敷居、この向こうはいったいどうなっているんだろう。知らない世界に出ることを決意した。

敷居を超えた。薄暗く狭い廊下を、恐る恐る歩いた。そのおどおどした姿を、家族たちは笑顔で眺めていたらしい。家族が見ると滑稽だっただろうが、ボクにとつては、初めてのバンジージャンプと変わらない。見知らぬ世界ほど不安なものはない。廊下の端、つまり入居はじめの玄関口までは到達した。だが少し高低があったので、恐ろしくて、まだ飛び降りることはできなかった。何やらにおう。家族の靴のにおいだ。くさいにおいがぼくは大好きだ。もつとも、どんなにおいでも限度があるが、まあ許せる程度なので気に入ったというべきだろう。いつかはその靴で遊んでやろう。世界が広がった。リビングの世界から数メートル越境したのだから。

このようにひとつひとつ新しい世界を獲得していくたびに、不安や恐怖、喜びと感動がある。ボクたち犬にとつても新鮮な体験なのだ。人間という動物は単細胞だから、自分たちに見える世界が、そのまま犬たちにも見えていると思つて

いる。大きな間違いだ。人間に見えている世界と、犬に見える世界、ゴキブリやハエに見えている世界は、まったく違うものなんだ。つまり人間も含めて、それぞれ生き物たちは、自分たちだけに見える、閉ざされた世界を現実と認識している。この現実といわれるものは、実は妄想や想像の世界にすぎないかもしれない。

そんなわけで、犬として生まれた以上は、当然犬なりの認識を語るしかない。

家の中の一階、リビングでの生活と家族にも慣れた頃、戸外に出る機会が訪れた。予防接種、何のだろうか。ともかく、戸外の空気も地面もまだ知らない。知っているのは安物の絨毯の感触だけ。

カアチャンのリーダーシップで、タバコ臭いオヤジがボクを抱いて、近所の動物病院に向かう。雑菌に対する免疫がないので、まだ土の上を歩いてはいけならしい。

寒さも少しはゆるんでいる。戸外に出て驚いた。青い空、冷たい空気、すれ違う人間、自然の光、初めての光景に緊張して、身体がこわばる。

病院、というよりは小さな医院。入ると、他の犬と飼い主たちで満席状態だ。近寄ってくる犬もいるが、ボクは緊張のあまり、硬直の態で無言になる。オヤジも同様のようだ。カアチャンは知り合いがいるらしく、おしゃべりに興じている。カアチャンに抱かれて、診察室に入った。床よりかなり

高い診察台におろされた。金属の感触が冷たい。高いところに置かれたので、怖さのために少し足が震える。オシッコをちびる犬もいるらしい。たかが注射でこれだから、実験に使われている動物たちや、虐待されている飼い犬は、どんなにか恐怖に怯えているか想像できない。何とかしたいが、何ともできない。

足に注射されても何も感じなかった。というよりも、これが痛いという感覚だと、認識していなかった。足にテーパーリングされると、身体が動かなかった。全身の抑制効果がある。家に帰ってテープを外してもらおうと、やっと動けるようになった。でも薬の効果が出るまでは、まだしばらく家中らしい。

免疫の効果が出る期間が経過したので、玄関ドアの外に出る許可が下りた。自由に動ける戸外は、玄関ドアと門扉の間の空間だけだ。でもこれが結構楽しい。

雀がいつも庭にやってくる。庭を囲む金網の塀に止まったり、雑草の上を飛び歩いたりする。一緒に遊びたいのに、近寄るとさっさと飛び去ってしまう。遊びたくて、飛びかかって捕まえたスズメは七羽を超える。ただ、遊びたかっただけなのに、結果的には瀕死の重傷を負わせてしまう。悪いことをしてしまった。

門扉のそばにいと、通りがかった近所のおじさんやおばさん、新聞配達の人、郵便局の人、誰もがボクの相手になってくれる。

散歩に連れて行ってくれるのは、カアチャンだ。真の飼い主である次男は、楽しく遊んでくれるが、散歩については熱心ではない。出かけて十分もすると、帰ろうとする。またオシッコもウンチもしていないのに。オヤジと長男は、ボクにほとんど興味を示さない。

飼い主たちはどう思っているのか知らないが、ボクにとつては、散歩は狩りであり、テリトリーの拡大と社交場なのだ。飼い主とボクの認識の違いが、散歩を楽しくないようにしてしまうことがある。特にオヤジがそうだ。散歩はボクの大小便のためだと認識しているので、一緒に外出しても、楽しく遊んでくれることがない。義務として仕方なく散歩をしているのだ。このことも、他のオヤジ連中に共通しているようだ。オヤジたちに連れられた、他の犬たちの表情を見ればわかる。だれもが緊張気味でそっけない。

(続く)

※この作品については、筆名は赤木マリオにします。

赤木健介